

JACTFL の役割

副理事長 吉田 研作

JACTFL は、今後の日本の外国語教育に大きな意味を持つ組織です。現在、日本では、グローバル人材の育成が盛んに叫ばれていますが、その実、多くの日本人の外国語に対する意識は、決して高くありません。2013 年に発表された産業能率大学の新入社員のグローバル意識調査の結果を見ると、700 名以上の新入社員のグローバル意識は非常に低いものとなっています。58%以上の新社員は、海外で働きたくない、と答えていて、これは、2001 年にはじめて調査が行われた時のほぼ倍に増えているのです。また、なぜ海外で働きたくないのか、という問には、「外国語に自信がないから」という答えが 65%に達しています。それだけ外国語が苦手な若者が増えているのです。その一方で、どこでも良いから海外で働きたい、という新社員も、過去最多の 29%にまで増えていることを考えると、今の日本の若者は、2極化しているといってもよいように思えます。

この調査で気になった点が他にもあります。その一つは、55%の回答者が今まで自分がうけてきた外国語教育に不満をいっていることです。2006 年のベネッセの調査で、小学生の保護者の 80%が自分たちが受けてきた外国語教育は役に立たなかった、と答えていましたが、その結果とも共通しています。そして、もう一つ気になるのは、これだけ外国語に自信がない、と答えているのにもかかわらず、26%以上の人は、外国語を勉強したくない、と答えているのです。これは、前回 2010 年の調査の時よりも増えているのです。

2020 年には東京オリンピックが開催されることになっていますが、このまま内向きで外国語に自信のない若者が増えたら、どうなるのでしょうか。少なくともオリンピックを契機に、外国語をやろう、という人が増えることは考えられます。

ところで、もう一つの問題があります。それは、日本で外国語というと、どうしても英語しか思い浮かばない人が大多数だということです。毎年、私のバイリンガル教育の授業で、バイリンガル、という言葉聞いた時に思い浮かぶ言語は何ですか、という質問をしますが、80%の学生は、英語と日本語を思い浮かべると言います。しかし、考えてみると、お隣韓国や中国との間に色々な問題を抱えている日本にとって、少なくとも近隣諸国の言語を学ぶことは非常に大切なことのはずです。にもかかわらず、日中、日韓関係が悪化すると、中国語や韓国・朝鮮語の受講者の数が激減したのです。今だから

こそ、近隣諸国とより緊密なコミュニケーションが必要なはずなのですが、、、

上智大学では、現在、EU のように、3 言語主義を進めようとしています。日本語は当然のこと、また、グローバルな場面でのコミュニケーションの手段としての英語は必須だが、それ以外に、日本人が海外で暮らし、仕事をする際には、その国の言語が必要になるだろう。つまり、ローカルな言語である日本語、グローバルな言語である英語、そして、もう一つ、英語よりも、交渉先の人とより親密なコミュニケーションができるためのローカルな言語が必要なのです。日本語と英語が必須なら、もう一つ少なくとも選択として個人個人が必要とする別の言語を学ぶ機会を設ける必要があるのではないでしょうか。

JACTFL は、今後の日本の外国語教育政策にしっかりとした提言をしていかなければならないと思います。

(上智大学)